

◆講演一

『新型コロナウイルスの本態とワクチン』

宮澤 正顯氏

(近畿大学医学部免疫学教室 教授高27回)

◆講演二

『新型コロナ×検疫』

北澤 潤氏

(元横浜検疫所 所長・現国立成育医療研究センター企画戦略局長 高36回)

◆ディスカッション

「私たちのこれからの中は？」

宮澤 正顯氏・北澤 潤氏・代田 昭久氏

(飯田市教育委員会教育長・当時)

◆講演



講演司会

柳澤昭浩さん



大嶋みどりさん

【講演会の動画 YouTube 1時間57分】



<https://www.youtube.com/watch?v=FcE SAFb5PDs>

在京同窓会第2部講演会は、柳澤昭浩、大嶋みどり（共に高36回）の進行のもと、「私たちのこれからの中は？」をテーマに計画、実施されました。

各20分の講演、40分にわたる質疑応答、ディスカッションで構成され、ウェブを通じて配信されました。

講演一の宮澤先生は、エイズウイルスやインフルエンザウイルスに対する宿主の抵抗性を決める遺伝子研究の第一人者であり、コロナ禍以降は、新型コロナウイルス及びワクチンに関し、一般への啓発のため多くのメディアにも出演されています。講演では、ウイルスの本態、ヒトの免疫のしくみ、ワクチンの有用性について言及され、私たちが知つておくべきもの Take Home Message を示されました。

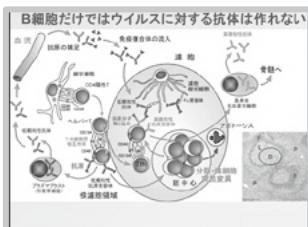
講演二の北澤氏は、高36回の同窓生であり、新型コロナウイルスの日本での感染拡大を意識する象徴的な出来事であつたダイヤモンド・プリンセス号で元横浜検疫所の所長としてその対応にあたり、これらの経験も踏まえ「新型コロナ×検疫」との演題にて講演。ウイルス感染症の過去・現在・未来を副題に、中世ヨーロッパでのペストの流行から、現在の検疫制度の成り立ち、将来展望を紹介されました。

◆ディスカッション

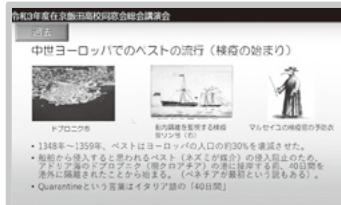
講演後のディスカッションには、自身も新型コロナウイルスの感染を体験した、高36回の代田氏も加わり、大きく3つ、「私たち個人ができる」と「家族・知人、学校、会社など所属するコミュニティでできるいふ」、



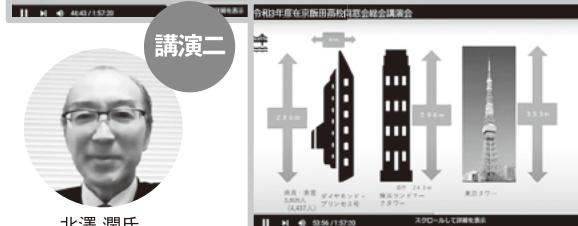
宮澤正顯氏



北澤潤氏の講演動画より



- 1348年～1359年、ペストはヨーロッパの人口の約30%を奪ひました。
- 初めから侵入すると思われるペスト（エイズと酷似）の侵入阻止のため、船員たちが島に立ち入り禁止の命令を出され、島に立ち入る船員を海上で隔離されたことから始まる。（ペネオアが最初といわれる）。
- Quarantineという言葉はイタリア語の「40日間」



北澤潤氏



宮澤正顯氏の講演動画より

最後に大きな視点で「国や世界レベルでも考えなければならないこと」をテーマに進行しました。

1つ目の「私たち個人でできること」として、代田氏からは自身の体験による新型コロナウイルス感染による社会からの誤解や偏見についての話があり、宮澤先生、北澤氏からはウイルスの特性からウイルス感染は人や立場を選ばない、また正確で信頼性の高い情報を知ることの重要性が指摘されました。

2つ目の「コミュニケーションでできること」について、宮澤先生は社会の科学リテラシーの重要性を指摘されました。子宮頸がんの要因となるHPV（ヒトパピローマウイルス）に対するワクチン接種を例に、ウイルス感染症から社会を守る上で、私たちが知つておくべきことへの教育、啓発的重要性について紹介されました。最後の討議ポイント、「世界的に考えなければならぬこと」については、以前よりはるかにグローバル化、すなわち国を超えての人の移動によるウイルス感染の拡大について、北澤氏より益々国際的な連携が重要なとなるだろうと言及されました。

最後に、視聴されていた同窓生からあがつた質問、「ワクチンの有用性に対する疑問」「国産ワクチンへの期待」「治療薬の開発の有効性」などについて回答を頂きました。

この原稿を書いている現在（22年7月）、日本においては感染力が強いとされるオミクロン株BA・5の流行により第7波に入った状況になっています。

今回の講演会で討議された「私たち個人ができること」「社会でできること」「世界的に考えなければならぬこと」は、現在でも重要なテーマとなっています。

講演、議論を通じ印象に残ったのは、信頼性の高い情報を得る科学リテラシーの重要性や、これらの欠如による誤解や偏見です。本当に、学ぶことの多い講演会となりました。当日の講演会の様子は、動画アーカイブとして公開されています。

（柳澤昭浩）



デスカッションに参加の代田昭久さん（紹介動画より）



4会場をつないでのディスカッション